

緊急時の対応マニュアル

信州大学基盤研究支援センター
動物実験支援部門

【地震発生時の対応】

1) 初期対応（生命、安全確保の優先）

作業を中断し、身の安全を確保する。

2) 運転中の機器への対応

機器（X線照射器やオートクレーブ等）を運転している場合は緊急停止する。

3) 使用中の薬品への対応

発火危険性や有害危険性のある薬品を使用中の場合は直ちに容器のフタを閉めるなど安全措置を講じた後、落下しないよう床に置く等の対処をする。

4) ガス、電気、水道、酸素ボンベ等への対応

ガス・水道・電気を使用している場合は直ちに使用を中止する。

5) 実験中の動物への対応

動物実験を中止し、速やかにケージ内に収容するとともに、逸走動物がないことを確認する。手術中の動物の処置を完了できないと判断した場合は、速やかに安楽死を行う。

6) エレベーター使用時の対応

東側エレベーターに乗っているときに強い揺れを感じた場合は、直ちに停止ボタンを押して近くの階に停止させ、強制解除脱出を試みる。※西側エレベーターには停止ボタンはない。強い揺れのため、強制停止したエレベーター内に閉じ込められた場合は、非常ボタンを押し外部と連絡を取り救援を求める。非常ボタンが機能しない場合は携帯電話等外部と連絡が取れる機器を持っていれば、動物実験施設事務室または（株）日本エレベーター製造（0570-070-990）などに電話をかけ、救援を求める。

7) 飼育室/実験室からの脱出と動物の逃亡防止

飼育室/実験室または前室のドアが完全に閉まることを確認し、ドアを閉めてから脱出する。閉まらない場合は、人命を最優先し、可能であれば板で隙間を塞ぐなどの動物の逃亡防止策を講じる。

8) 脱出経路の確保

2階玄関のドアが強制開錠になっているか、確認する。

2階の玄関からの退避が難しい場合は、緊急避難経路（1階搬入口より屋外に退避する経路）を確認し脱出経路を確保する。

9) 安否の連絡

所属部署の緊急連絡体制に従い安否連絡をする。

※余震の発生や2次災害発生等の危険な状態が続く場合は避難経路より避難し安全を確保してから安否の連絡をする。

10) 被害状況の確認と連絡

被害状況を確認し、被害があるようなら実験責任者及び動物実験施設事務室に被害状況を連絡する。平日勤務時間外および休日の場合は、動物実験支援部門教職員に直接連絡を取る。

11) 火災、停電の発生時の対応

下記【火災発生時の対応】および、【停電時の対応】を参照

12) 負傷者がいた場合

施設事務室および廊下に常備されている救急セットを用いて手当てをする。手当てだけでは不十分な場合、病院で治療を受けられるように信州大学医学部附属病院高度救命救急センター受付に連絡をとり、手配する。

13) 逸走動物がいた場合

下記【逸走動物発見時の対応】を参照

14) その他、復旧作業

動物実験支援部門教職員と連携し、事態が落ち着いた後、復旧作業を行う。

【火災発生時の対応】

1) 初期消火活動

周りの人に火事が起こっていること伝え、協力を要請し、水や消火器を用いて、初期消火活動を行う。

2) 緊急連絡

自力での消火が無理だと判断したら、平日（8:30-17:15）の場合は医学部庶務係、平日勤務時間外及び休日の場合は警務員室あるいは信大災害・緊急ダイヤルに火事の状況と場所を連絡して、消防署に連絡してもらう。どちらにも繋がらない場合は、動物実験支援部門教職員（あるいは支援部門長）に連絡した上で消防署に直接連絡する。

3) 支援部門教職員への連絡

身の安全を確保し、動物実験支援部門教職員に火災発生を連絡する。

夜間休日等で支援部門教職員が不在の場合は、館内放送をかけ、施設内にいる人に避難するようにアナウンス後に、支援部門教職員に電話連絡する。

4) 動物の確認

消火活動が終了した後、現場対策担当の許可を待って、動物の確認を行う。

【停電発生時の対応】

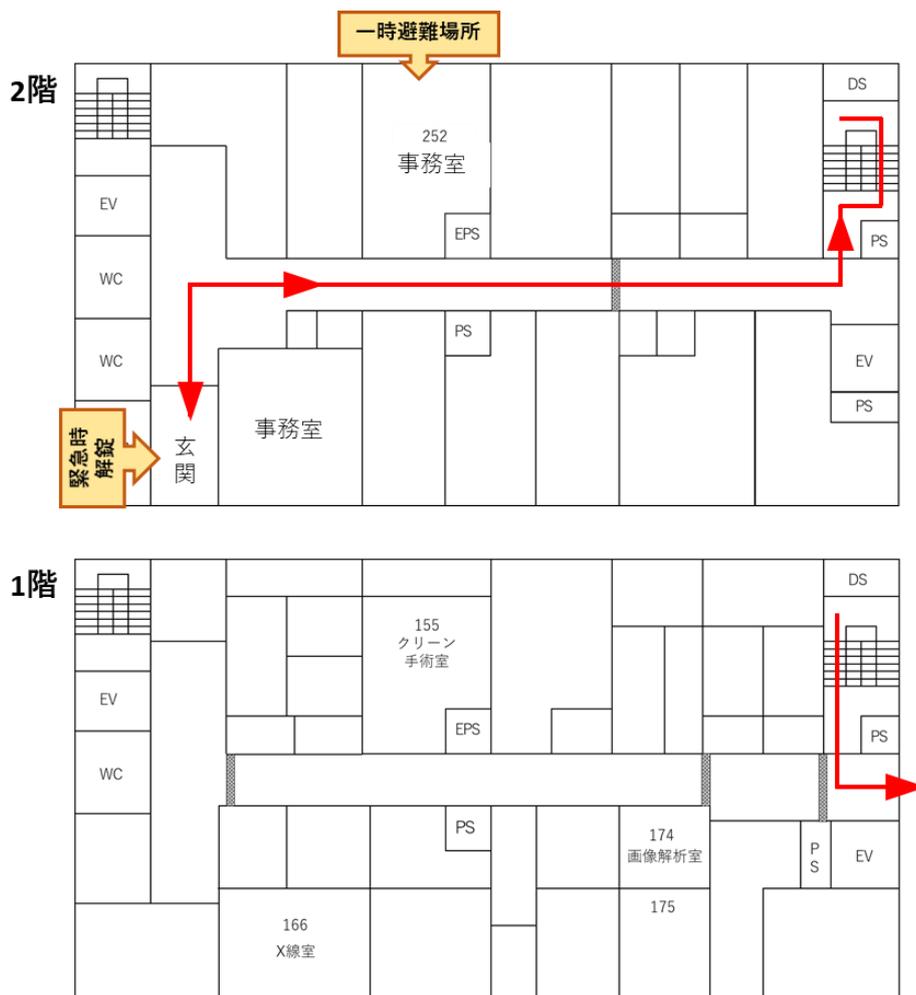
1) 作業を中断し、身の安全を確保する。

2) 動物実験支援部門教職員に停電の旨を連絡する。

【緊急避難経路】

地震・火災等の緊急時は2階玄関の扉は開錠になる。

なお、玄関から出られない場合は、1階東側扉より避難する。



【逸走動物発見時の対応】

○マウス・ラット等(3～5階エリアで飼育中)の動物が逸走した場合

捕獲し、各飼育室の緊急用ケージに収容(飼育中のケージに戻さない)し、動物実験支援部門教職員に報告する。

遺伝子改変動物が飼育室外に逸走した場合は、速やかに動物実験支援部門教職員に報告し、報告を受けた支援部門教職員は直ちに実験責任者へ報告する。その後の対応について関係各部署と協議を行い、適切な対応を講ずる。

報告および対策事項

1. 発生日時
2. 場所
3. 実験責任者の所属、職、氏名
4. 遺伝子組換え実験計画書の承認番号と課題名
5. 遺伝子組換え動物の種(系統)と逃亡の経緯
6. 捕獲された場合、遺伝子組換え動物に対する措置
7. 原因および再発防止策

○ブタ等の大動物が施設内で逃亡した場合

発見者一人では対応せず、動物実験施設事務室へ連絡する。平日勤務時間外及び休日の場合は動物実験支援部門教職員に直接電話する。動物が興奮状態にあり利用者に危害を与える恐れがある場合は、応援者が来るまで逃亡区域外へ退避して身の安全を確保する。他区域や施設外への逃亡を防ぐために、逃亡区域の封鎖(立入制限)を行う。応援者を呼び、捕獲用手袋を着用して、捕獲器または麻酔を用いて、2人以上で捕獲作業をする。その他、捕獲に有効な道具として、モップやホウキ、軍手、飼料袋などがある。
* ブタ用捕獲器と刺又、捕獲用手袋は中央廊下のパイプスペース(北側)に保管する。

○大動物の施設外への逸走が確認された場合

動物実験支援部門教職員及び医学部庶務係あるいは信大災害・緊急ダイヤルに逸走の旨を電話連絡する。その後、医学部庶務係を通して警察に連絡が行き、必要に応じて捕獲要請が出る。

【実験動物に咬まれた時】

- 1) 患部を流水で十分洗い流し、出血がある場合は止血させる。
- 2) 出血が止まったら患部を消毒液等で消毒する。
 - 救急用具は動物実験施設事務室及び4階西側廊下に設置している救急箱のものを使用できる。
 - 傷の程度によって、あるいは感染症や動物アレルギーの可能性がある場合は病院へ急行する。
 - 感染が疑われる場合は、動物実験支援部門長（管理者）に詳細を報告した後、「安全衛生委員会」に報告書を提出する。

【毒劇物、化学物質を浴びた場合の対応】

- 目に入った場合は、3階東側の緊急用洗眼シャワーでよく目を洗い流す。
- 皮膚に付着した場合は、3階東側のシンクのシャワー、蛇口からの流水でよく洗い流す。
- 全身に付着した場合は、緊急用シャワー（3階廊下中央）で洗い流し、使用後は動物実験支援部門教職員に報告する。
- 水洗後、強酸の場合は飽和炭酸水素アンモニウム水で、強アルカリの場合は2%酢酸で洗う。
 - 違和感、異常を感じられた場合は、専門医に診てもらおう。また、動物実験支援部門長（管理者）に事故報告を行う。

【やけど（熱傷）時の対応】

- 比較的小範囲の熱傷の場合
 - 直ちに水道水などの流水により局所を冷やす。冷たいタオルや保冷剤などを用いてもよい。皮膚に水泡を形成した場合は破らずそのままにしておく。
- 広範囲な熱傷の場合
 - 生命にもかかわるので、至急医学部附属病院に搬送する（高度救命救急センターに連絡）。この際、熱傷部に付着した衣類を無理に脱がさない。

【針刺し時の対応】

- 感染症の危険性がない場合
傷の消毒を行い、実験責任者に報告する。
- 感染症の危険性がある場合
 - 1) 直ちに傷口より血液をしぼり出し、流水で洗い流し消毒する。
 - 2) 実験責任者に報告する。
 - 3) 医療機関に行き危険性のあるものについて診察・処置してもらう。